

意見陳述書

2016（平成28）年11月18日

佐賀地方裁判所民事部 御中

原告 久保田美奈穂

1 失った暮らし

福島第一原発事故当時、私は、夫と、当時6歳と1歳の息子2人の4人で、茨城県水戸市に住んでいました。夫は、自営業をしていたので忙しく、毎朝早くに家を出て夜遅くに帰宅する毎日でしたが、週末は家族でお出かけをするなど、家族を大切にしてくれていました。夫の両親も息子たちを可愛がってくれ、よく家族で夫の実家へお泊まりに行っていました。

自宅のマンションには、同世代の子どもを持つ家族がいて、毎日のように一緒に食卓を囲み、寝る時間にお別れをする・・・という生活をしていました。花見などの季節ごとの行事にもみんなで行き、そんな中で子どもたちはみんな兄弟のように育っていました。

2 原発事故の発生と沖縄への避難

原発事故が起こっていたことを知ったのは、地震後の物資不足などから、息子たちを連れて栃木へ一時避難をしていた3月15日でした。

ラジオのニュースで原発が爆発していたことを初めて知り、その瞬間、チェルノブイリの事故を思い浮かべました。最初はただ危ないと思うくらいでしたが、被ばくの影響を調べていくうちに、このまま生活をしていてもいいのだろうかと思うようになりました。チェルノブイリの事故の時には、福島県と茨城

県ほどの距離のところでも高い放射線量が測定されたと知り、原発事故が起きていることを知らなかったとはいえ、私や子どもたちはどのくらい被ばくしたのだらうと怖くなりました。そこから、子どもたちを放射能から守るためには何ができるのだらうと悩む日々が始まりました。

4月に入り、長男の小学校の入学式もあって茨城に戻りましたが、線量が高かったらどうしようと不安でした。放射性物質は目に見えないため、周りがどれだけ汚染されているのかわかりません。子どもの通学路の線量を計ってほしいと市役所をお願いしても、断られました。

しかし、自費でガイガーカウンターを買って校庭の側溝を測定したら、一般の人の被ばく線量限度を超える $0.25 \mu\text{Sv/時}$ でした。さらに、夫の仕事場は、 $0.5 \mu\text{Sv/時}$ でアラームが鳴りやみませんでした。

茨城に戻って以降は、必死に情報収集し、息子たちをできる限り被ばくさせないために一生懸命な毎日でした。息子たちはなるべく外に出さないようにしました。自宅内に放射性物質を入れないよう、帰宅した後は玄関で服を脱がせて、そっと洗濯機へ入れてすぐに洗濯し、シャワーを浴びさせました。一日に何回も家中の拭き掃除をしました。拭き掃除をすると、室内の線量が少し落ちるのです。食べ物にも気をつけて、水も買い、九州産の食品にこだわりました。

私がここまで気をつけていたのは、息子たちのためです。初期の被ばく量が分からない以上、将来、息子たちに何らかの健康影響が出るかもしれない、その時に私は代わってあげられないからです。

ですが、長男が通う小学校では線量を計ることもしませんし、給食で出される牛乳からも放射性ヨウ素がでていたということでした。長男の小学校では砂場は除染をしませんでしたが、すぐそばの国立の小学校では、子どもたちに使わせる前に砂を5cmはぎとっていました。

原発が爆発して放射性物質が外に出ているのだから、危なくないはずがないと思っていましたが、やっぱり危険なんだと思いました。

2011年6月8日、私は、息子二人と実母と、沖縄へ避難しました。

4 沖縄での避難生活を続ける葛藤

夫は、沖縄に避難することを全面的に賛成してくれたわけではありませんでした。私が何度もお願いしたので、当初、避難することは認めるけれど経済的な援助はしないと言われました。そのため、貯金を切り崩しての生活でしたが、放射性物質を気にせず、青空の下で息子たちと一緒に遊べ、何のためらいもなく呼吸ができる毎日は幸せでした。

しかし、沖縄での生活が続き、夫との関係は修復不可能になっていきました。

夫は、茨城は安全だという前提で話をするので、どうしても喧嘩になりました。また、事故前は、仕事から帰ってくる夫のために食事を作り、休日には家族の団欒をもつという生活ができていたのに、そのような生活を夫から奪ってしまったと後ろめたい気持ちでいっぱいでした。

ですが、私は、まだ原発の廃炉作業も終わっていないのに茨城に戻ることはできませんし、夫は仕事をすてるという決断はできませんでした。私たちは、その溝を埋められないまま、2014年6月、協議離婚をしました。離婚をして、私は、夫に対する罪悪感が少し薄れた一方で、家族を失いました。

5 子どもたちへの思い

息子たちは事故直後にどの程度被ばくをしたのか分かりません。ただ、健康診断の結果で、二人とも甲状腺ホルモンの数値が高かったときは、被ばくをさせていたのだとショックでした。沖縄に来た後、毎年3月が近づくたびに元気がなくなり、怖がり甘えてくる息子を見て、被ばくをさせたうえに、見知らぬ土地で父親とも友達とも離れて生活をさせることが本当にこの子のためになるのかを思い悩んだこともありました。しかし、茨城にいる友人の子どもの尿からセシウムが検出されていることを聞くと、やはり茨城で生活をさせることはできません。

6 さいごに

私たちは、福島で事故で、原発は人にはコントロールできないと知ったはず
です。それなのに、今、玄海原発を再稼働しようとしています。

事故前は、あの生活がずっと続くのだと思っていました。まさか、自分が放射能におびえる日が来るとは思ってもみませんでした。そして、子どもの健康に悩み、将来に不安を抱え、家族を失うことに苦しむ、そんな生活をするとは思ってもみませんでした。

私は、こんな苦しみを繰り返してほしくありません。そして、事故前、原発に無関心だった私自身の責任として、原発を廃炉にしなければいけないと思い、この裁判の原告になりました。

わが子を守るために避難をした、多くの母親の苦しみを無駄にしないで下さい。

以上